

**立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）**  
**大学院生研究**  
**2008年度研究成果報告書**

<b>研究科名</b>	立教大学大学院	社会学研究科	社会学専攻
<b>指導教員</b>	所属・職名	氏名	
	社会学部 教授	奥村隆 印	
<b>自然・人文の別</b>	人文	<b>個人・共同の別</b>	個人
<b>研究課題名</b>	病いの多様性とみとりの専門性－<生>をまっとうする/支える関係性の構築に向けて		
<b>研究代表者</b>	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	社会学研究科 社会学専攻 博士後期課程 3年	齋藤雅哉 印	
<b>研究組織</b>	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
<b>研究期間</b>	2008	年度	
<b>研究経費</b>	200	千円	

**研究の概要** (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

病院内での参与観察ならびにインタビュー調査をおこなった。病院には様々な病いを持った人々が訪れる。彼らに対して、ケアする側の人々は、専門職としてどのような態度を持って臨んでいるのだろうか。先行研究では、主に「感情労働」の議論がされ、バーンアウトが問題点とされてきた。しかし、バーンアウトばかりがおこる仕事では、誰も望まなく、また続けていく事は困難となる。そこで、2つ病院での調査をおこない、2～5年目の看護師ならびに、看護部長へのインタビュー、参与観察をおこなった。結果として、多様な病いを持つ人々に対して「みとりの態度」を身につけていくことが求められ、教育・実践されていく過程を明らかにした。また、沖縄における占領期の社会福祉制度についての予備調査、南風原町での小地域福祉サービスへの参与観察をおこなった。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ 感情労働 ] [ コミュニケーション ] [ みとりの態度 ]

**研究成果の概要** (図・グラフ等は使用しないこと。)**【調査①】**

リハビリテーション病院と急性期病院において、2008年4-9月の間に隔週1回深夜の患者受け入れの業務につき、病院内の参与観察をおこなった。また、2つの病院の看護部長と、2-5年目の看護師にインタビュー調査をおこなった。

いわゆる「看護師」とやっていける見込みを得るためのミクロ過程を明らかにした。

**成果①日本社会学会報告要旨**

2008年に日本社会学会において「みとりの態度——〈看護職になる〉こと——」という報告をおこなった。「感情労働」をはじめ、「対人サービスは疲れる」という指摘がされる。その代表的な職業として「看護職」がある。確かに、特別な感情を持った患者の〈生〉との対話はしんどいものかもしれない。しかし、「しんどい」仕事を続けられるのは、理想的や明るい話ではなくても、その仕事から得られる「達成感」のようなものがあるのではないか。三井さよ(2004)は、そのプロセスを「戦略的限定化」という概念で説明をする。また、三井は、その概念が遂行されるために「話をさく」態度の必要性を指摘する。三井の議論を検討した上で、本報告では「みとりの実践と専門性獲得のための教育」に着目し、看護部長へのインタビュー調査と病院内での参与観察をおこない、患者が持つ混沌とした〈生〉を支え続ける態度——「みとりの態度」が、いかに形成されていくのかについて考察をおこなった。

参考文献 三井さよ, 2004, 『ケアの社会学』

**【調査②】**

昨年度からの継続で、沖縄県内でおこなわれている平和ガイドについて調査をおこなった。さまざまな広がりを見せている平和ガイド。その先駆けとなった「平和ネットワーク」の会報を収集し、分析をした。調査時期 2008年4-7月。(一部共同研究の成果)

**成果②**

「〈沖縄戦〉を語り継ぐ——平和ガイドの試み——」桜井厚他編『過去を忘れない——語り継ぐ経験の社会学』せりか書房 p100-3.

沖縄戦から60年以上が過ぎた。何事も当事者のみが出来事を語れるのなら、当時20歳の人は、80歳になる。では、沖縄戦という社会的出来事を体験していない人々は、沖縄戦を語れないのか。もしくは、好きなように語ることが出来るのだろうか。このような問題意識から、沖縄戦を語り継ぐ行為を続けている「平和ガイド」に着目した。

彼らは、体験者からの聞き取り調査を今も続けている。彼らは、自らの行為を「聞きとった事を次世代の語り継ぐ取り組みである」と結論づける。別の言い方をすれば、学び続ける態度であると言えるだろう。もちろん、体験者の人々も平和ガイドとして活動をしている。もちろん、戦争体験者にも、彼らの戦後の生活史がある。だからこそ、語られる内容＝〈経験〉は変わらずとも、語られ方は変わっていくのである。このように、体験者の語りを聞きとり、学び続ける平和ガイドの試みから、沖縄戦の体験の継承可能性を提示した。

\* 沖縄の高齢者の自分史の特徴としては、戦争体験と家族についての記述が多いという。(小林1997)そこで、研究代表者の問題関心からこのような調査研究をおこなった。  
参考文献：小林多寿子1997『物語られる「人生」——自分史を書くということ』学陽書房。

**【調査③-1】**12月に、沖縄県公文書館において、戦後の占領期における社会福祉・家族福祉に関する議会資料等の収集をおこなった。今後も、関連する新聞記事の収集と合わせて継続的に調査をおこなっていく。調査時期 2008年12月—(継続中)

**【調査③-2】**沖縄県内でおこなわれている小地域福祉サービスについて、南風原町の役場ならびに社会福祉協議会の職員にインタビュー調査をおこなった。この調査も、③-1とあわせて継続調査をおこなっていく。調査時期 2008年12月—(継続中)

**研究成果の概要 つづき**

**成果③ 「自由と安定」**

問題関心としてある〈家族〉の共同性について「自由と安定」という点から執筆した。家や家族が持っていた「不自由」な側面に着目することで、〈家族〉の共同性を再組織化するための視座を提示した。家族論の多くは、「自由」という概念に対して、十分な価値付与されてきた。このことは、別の言い方をすれば、「家族」の共同性を自明なものとして位置づけてきたことを意味するのではないか。本研究では、家族成員に一定の自由が与えられているという認識に立ち、「〈家族〉の共同性」を再組織化するための視座を提示した。

これを受けて、現在は「家族のきずな」に関する新聞記事の分析をおこなっている。